■ストレンナ２０２５

希望に錨をおろし、

ともに歩もう

ステファノ・マルトリオ副総長による解説

阿部仲麻呂 訳

■**2025 年度**　サレジオ家族　**ストレンナ**［贈りもの＝年間目標］

希望に錨をおろしつつ若者たちといっしょに巡礼しましょう

阿部仲麻呂訳［2024 年 12 月 31 日/→2025 年 1 月 2 日改訂］

目次

1. ドン・ボスコの夢を新たにするために、私たちの希望としてのキリストと出会う

1.1 聖年（ヨベルの年［雄羊の角笛を吹いて神の慈愛による解放を告げる一年］）

1.2 サレジオ会のはじめての宣教師の派遣を記念するにあたって

2. 聖年（ヨベルの年）——私たちの希望としてのキリスト

2.1 巡礼者たち——キリスト者の希望に錨をおろしていること

2.2 キリストへの旅であり永遠のいのちへの旅でもある希望

2.3 希望の特徴とは、どのようなものなのでしょうか？

2.3.1 希望とは、継続的で、迅速で、先見的で、預言的な緊張感のことです

2.3.2 希望は未来への賭けです

2.3.3 希望は決して個人的なことがらとして済まされるようなものではありません

3. 宣教活動の土台としての希望

3.1.希望とは、物事に対して責任をともなって応えることへの招きです

3.2.希望とは、キリスト者の共同体を勇気づける問いかけです

3.3. «DA MIHI ANIMAS»（我にたましいを与えたまえ）——宣教者の「こころ」

3.3.1.宣教者のこころがまえ

3.3.2.再認識、再考察、再起動（再出発）

⑴神を再認識しつつ感謝すること。

⑵「永遠につづくものはない」という事実を、再考察すること。

⑶再起動すること、つまり毎日くりかえされる再出発。

4.具体的に日常的な生活に反映される聖年と宣教の希望

4.1.あかしを求める日常生活における強さとしての希望

4.2.忍耐することと待つことのわざとしての希望

5. 私たちの希望のはじまり——神からドン・ボスコへ

5.1 私たちの希望の原点としての忠実な神

5.1.1 夢についての簡単な言及

5.1.2 希望の「巨人」としてのドン・ボスコ

5.1.3 ドン・ボスコにおける希望の特徴

⑴「すでに」という確信——希望の一番目の構成要素

⑵「まだ」完成されてはいないことを、はっきりとわきまえる——希望の二番目の構成要素

⑶救いの勤勉さ——希望の三番目の構成要素

5.1.4ドン・ボスコの希望がもたらす「実り」

⑴よろこび——希望がもたらす一番目の「実り」

⑵忍耐——希望がもたらす二番目の「実り」

⑶相手を育む感覚（教育的な感受性）——希望がもたらす三番目の「実り」

①慎重さ（賢慮、あるいは「聖なる狡猾さ」）

②大胆さ［勇猛果敢な姿勢］

③寛大さ［度量の大きな心もち、豪快な気前よさ］

5.2 神に対する忠実さ——最期の日にいたるまで

6. 聖母マリアといっしょに

註

希望に錨をおろしつつ若者たちといっしょに巡礼しましょう

ドン・ボスコのサレジオ家族のさまざまなグループに所属されている親愛なる姉妹や兄弟の皆さん、2025 年の新年を迎えるにあたり、心からのご挨拶を申し上げます。

教会と私たちの家族にとって二つの重要な出来事が重なるこの恵みの時期に、私は皆さんひとりひとりに、心をこめて語りかけたいと思います。

二つの重要な出来事とは、2024 年 12 月 24 日にバチカンのサン・ピエトロ大聖堂の聖なる扉が開かれたことで、おごそかに始まった①「2025 年の聖年」と、私たちの父ドン・ボスコによる非常に強い願いによって企画された②「はじめての宣教師派遣の 150 周年」のことです。ちょうどいまから 150 年前の 1875 年 11 月 11 日に、サレジオ会のはじめての宣教師団がアルゼンチンおよびアメリカ大陸の他の国々に向けて出発したのです。

これらは、希望をもたらす二つの重要な出来事なのです。希望とは、まさに教皇フランシスコが今回の「聖年」の開催を発表する際の重要な視点として掲げたあの美徳のことです。同様に、宣教活動の出来事は、宣教のために出発した（そして出発しようとしている）人びとばかりか、宣教師による導きを受けた人びとにとっても意味深いものなのであり、つまりあらゆる人にとって希望のきざしが感じられるのです。

したがって、私たちに授けられているこの新しい一年は、毎日のささやかな生活を大切にして成長するためのアイディアに富んでおり、他者への気配りを心がけることで私たちの人がらもまた豊かな実を結ぶことになるでしょう。こうした成長は、神を人生の中心にすえることで可能となるもので、「私は、あなたを自分よりも優先しましたよ」と思える心のなかでのみ生じます。

いま述べた話題をさらに強調し、教会が新しい一年を通して経験するよう招かれていることがらを、この解説ではサレジオ家族の魅力にもとづいて探ってみたいと思います。つまり、ドン・ボスコの家族である私たちを新しい地平へと導くものはいったい何なのかを確認したいのです。

1. ドン・ボスコの夢を新たにするために、私たちの希望としてのキリストと出会う

このストレンナ［贈りもの＝年間目標］の表題は、2025 年の通常「聖年」と、ドン・ボスコがアルゼンチンに派遣した「はじめての宣教師派遣の 150 周年」という二つの出来事を重ね合わせてつくりあげました。

これら二つの出来事が同時に重なったことを、私はあえて「神のおとりはからい」［神のみせつり、神の御計画］と呼んでいますが、ともかく 2025 年は私たちサレジオ家族全員にとって特別な一年となります。そしてドン・ボスコのサレジオ会（男子サレジオ会）にとっては、なおさら明らかに格別な年となります。なぜならば、2025 年 2 月から 4 月にかけて開催されることになる第 29 回総会では、新しい総長と新しい総評議員の選出などが行われるからです。

したがって、今回の世界規模の出来事は男子サレジオ会にとっての格別な出来事でもあり、さまざまな形で私たちを巻き込むものですので、この一年の出来事は非常に強烈な経験となることでしょう。なぜなら、これらの出来事のおかげで、私たちは、よりいっそう強烈にキリストに出会えるかけがえのないよろこびをかみしめるとともに、ゆるぎない希望を実感することにもなるからです。

1.1 聖年（ヨベルの年［雄羊の角笛を吹いて神の慈愛による解放を告げる一年］）

「希望は、欺かない（Spes non confundit!）」（註 1）

この呼びかけにもとづいて、教皇フランシスコは「聖年」を始めました。なんと素晴らしいことでしょう。そして、なんと「預言的な」合図なのでしょうか。

聖年とは、巡礼の歩みなのですが、言い換えるとイエス・キリストを私たちの生活の中心にすえることであるとともに、イエス・キリストをこの世界の生活の中心に戻すための努力を積み重ねるひとときです。なぜなら、イエス・キリストこそが私たちの希望だからです。まさに、イエス・キリストは教会と全世界の希望なのです。

イエス・キリストや他の姉妹や兄弟たちと私たちを結びつける希望を今日の世界が必要としていることを、私たちはじゅうぶんに理解しています。私たちを巡礼にかりたて、動かし、歩き始めるようにうながす希望が必要となります。私たちは、神が生きておられることを再発見するような希望について語っているのです。まさに教皇フランシスコは「希望が皆さんの心を満たしますように」と述べていますが、希望が皆さんの心を温めるだけでなく、じゅうぶんに満たし、さらにあふれるばかりに広がりますように（註 2）。

1.2 サレジオ会のはじめての宣教師派遣を記念するにあたって

そして、あふれるばかりの希望は、いまから 150 年前にアルゼンチンへのはじめてのサ

レジオ会の宣教師派遣に参加した人びとの心を満たしていたものでもありました。

ドン・ボスコはヴァルドッコの小さな仕事部屋から、あらゆる国境を越えるほどに深いおもいをはせて、弟子たちをイタリアの裏側にまで送り出しました。彼は、ぬくぬくとした安易な生活をいっさい度外視して前人未踏の土地に弟子たちを送り出しました。ドン・ボスコは自分が始めた青少年の世話をさらに前進させ、他の地域の人びとといっしょに歩み、希望をいだくとともにあらゆる人に希望を吹き込むように弟子たちを派遣したのです。彼は、着の身着のままの彼らを送り出しました。そして最初の同志たち（若い弟子たち）は、ほとんど何も持たずに、ただひたすらに出発しました。いったいどこへ行くというのでしょうか。実は、彼ら自身もどこへ行くのかを理解していませんでした。しかし、希望にあふれていた彼らは従順でした。なぜなら、神こそがたしかに生きており、私たちを着実に導いてくださるからなのです。

現在の私たちもまた希望にあふれ、熱心な従順さを身につけることで新たな活力を得て、巡礼者として出発するようにうながされています。だからこそ、宣教師派遣の記念日を祝うべきなのです。なぜなら、私たちが神からの贈りもの（個人的な業績に対する賞与などではなく、むしろ主から無償で授けられる恵み）に気づくのに役立つからです。つまり、宣教師派遣の記念日を祝うことは、私たちがこの出来事の意味を思い出し、未来に立ち向かい、新たな世界を築く力を得ることを可能にします。

ですから、今日、私たちは、充実した未来を実現するために生きましょう。そして、私たちが偉大だと考える唯一の方法で充実した未来を実現しましょう。それは、私たちの唯一の希望であるキリストに出会う旅を、若者や私たちの環境にいるあらゆる人びととともに味わうことです（特に、最も貧しい状況に追いやられて、忘れ去られたままの人びとを最優先しましょう）。

2. 聖年（ヨベルの年）——私たちの希望としてのキリスト

聖年は、私たちの希望であるキリストに錨を下ろして、いっしょに旅することです。しかしながら、このことは、ほんとうは何を意味しているのでしょうか。

2025 年に聖年の行事を開催するための呼びかけを公表した大勅書『希望は欺かない』という公文書のなかで描かれている希望を特徴づける要素を、ここでいくつか紹介しておきましょう。

2.1 巡礼者たち――キリスト者の希望に錨をおろしていること

私たちは、いかなる者でさえも私たちをキリストから引き離すことはできないと確信しています（註3）。なぜなら私たちは彼に錨をおろし、しがみついて安定し、そうしなければ助からないからです。錨なしでは旅をつづけることはできません。したがって希望の錨は、御父の御計画において十字架の上で人類の苦しみや傷をになうキリスト御自身です。

実際に、錨は十字架の形をしており、それがカタコンベ［ローマ近郊の地下墓所］にも描かれ、救世主キリストに忠実な死者の安らぎを象徴しています。

この錨は、すでに救いの港にしっかりと固定されています。私たちの仕事は、自分たちのいのちを錨に結びつけることです。つまり、私たちの船をキリストの錨につなげるロープに結びつけることです。

私たちは荒れた海を航海しているので、軌道からはずれて流されないように、何かしっかりしたものに自分たちを固定する必要があります。しかし、もはや私たちの課題は錨を投げて海底に固定することではありません。むしろ、私たちの課題は、いわばキリストの錨がしっかりと固定されている天から垂れ下がっているロープに私たちの船を結びつけることです。このロープに私たち自身を結びつけることで、私たちは救いの錨につながり、生きる希望を確かなものにします。

希望は、私たちの人生という船が、御父の右に座す十字架にかけられたキリストに固定された錨に私たちを結びつけるロープに繋がれているとき、つまり、御父との永遠のまじわりである聖霊の愛のただなかにあるときこそ、確かなものとなるのです（註4）。

いままで述べたことは、「主の昇天」を記念する感謝の祭儀の典礼の際に使用される祈願文にじゅうぶんに表現されています。

> 「全能の神よ、聖なるよろこびで私たちをよろこばせてください。そして敬虔な感謝をもって祈る私たちを再びよろこばせてください。あなたの御子キリストの昇天は私たちが高められることでもあり、かしらであるキリストが栄光のうちに先に昇ったところに、からだである教会は希望のうちに従うよう求められているからです」（註5）。

チェコの作家で政治家でもあるヴァーツラフ・ハヴェルは、希望を心の状態、あるいは、たましいの次元であると説明しています。つまり、希望とは、世界の出来事を先に知ろうとするような態度ではありません。安易な未来予言などではないわけです。

さらに、ビョンチョル・ハンは次のように述べています。

「希望とは精神の方向性であり、物事を直接的に経験するようなこの世界を超越し、その地平線のはるか向こうのどこかに根ざすことになる心の方向性です」。私は、希望の最も深い根源は超越的なものであると感じています。……中略……深く、力強い希望は、物事がうまくいったときの充実感とは同じではありません。ふだんは、人生が自分に微笑みかけてくれるから、人生に微笑みを返したい、といった実感が希望のように理解されがちなのですが、そうではありません。

「私たちはもっと深く考えなければなりません。私たちを錨へと導くロープの上を歩かなければなりません」。「決して見返りを求めることなく、むしろ何かのために努力することが正しいからという理由だけで、私たちひとりひとりがひたすら努力することが希望という能力なのです」。つまり、あらかじめ何かが成功を保証しているから努力するというわけではないのです。むしろ、失敗する可能性があり、うまくゆかない場合もあります。私たちは最初からうまくゆくことを望んでいませんし、物事を楽観視しているわけではありません。私たちは物事が実現するように、ひたすら努力するにすぎません。それゆえに、希望は楽観主義とは同じものではありません。

希望とは、何かがうまくゆくという思い込みなどではなく、むしろ結果に関係なく何らかの意味が生じてゆくことへ確信なのです。

「なんらかの意味があることを信じて、ただひたすら努力をする姿勢が、独自の価値観や信仰を前提とする希望なのです」。

「独自の価値観や信仰があるときに私たちは希望をいだき、生きる力を与えられ、絶望のまっただなかでさえも、いくどでも生きる意味を実感することができるようになるのです」(註 6)。

しかし、はたして錨をおろしたままで旅をつづけることはできるでしょうか。錨がおろされているままだと、あなたは身動きができず、そこに引き留められ、釘づけにされているままです。この旅は、いったいどこへつづくのでしょうか。旅は永遠につづくのです。

2.2 キリストへの旅であり永遠のいのちへの旅でもある希望

永遠のいのちの約束は、私たちひとりひとりに対して授けられています。しかし人生の旅を迂回するものではなく、上方への飛躍でもなく、地球を後にして宇宙へと飛び立ち、道ばかりではなく路上の塵にさえも気にもとめないロケットに搭乗することを提案するのでもなく、あるいは私たち抜きで船を海のまんなかに漂わせるわけでもありません。

この約束は確かに永遠に固定された錨です。しかし、私たちは海を渡る船を安定させるロープによって錨に繋がれています。そして、錨が天国に固定されているという事実こそが、船が海のまんなかで動かずとも、なみまを進むことを可能にしているのです。

もしキリストの錨が私たちを海の底に釘付けにしていたとしたら、私たち全員は、いま生きている場所だけで一生涯留まることになるでしょう。おそらく穏やかで、とりたてて問題もないのかもしれませんが、旅することもなく、前進することもなく、ただそこに停滞したままです。それとは逆に、自分の人生を天国に錨で固定する場合には、希望を生み出す永遠のいのちの約束が私たちの進歩を妨げたり、自分だけの身を守って閉じ込もるような安心感を与えたりするのではなく、むしろ私たちがかけがえのない自分らしさの道を歩みつつ前進する信頼感を与えることを保証してくれます。キリストによってすでに達成された確かな目標の約束は、人生のあらゆる一歩を堅固で決定的なものにしてくれます。

神の慈愛深い解放を告げ知らせるヨベルの年にもとづく「聖年」を永遠のいのちに向かう巡礼への招きとして、つまり新たな歩みに一歩踏み出すための招きとして、あるいは自分勝手な姿勢から抜け出してキリストに向かう招きとして理解することが重要です。

こうしてヨベルの年は、常に旅することと同じ意味を備えていました。ほんとうに神を求めるならば、動かなければなりません。歩かなければなりません。神への望み、つまり神への憧れは、神を見つけるようにあなたを動かすと同時に、あなた自身と他の人びとを見つけるよう導くのです。

「決して死ぬことがないように、生まれた」(註 7)。

神のしもべキアラ・コルベッラ・ペトリッロの生涯を特徴づける説明文は美しくて、意味深いものです。そうです、私たちがこの世に生まれてきたのは永遠のいのちに向けられているからです。永遠のいのちは死の扉を突き破る約束なのであり、永遠に「神と向き合う」道へと私たちを解き放ちます。実に、死というものは、私たちの地上での人生を閉ざす扉であると同時に、神との決定的な出会いへと開く扉でもあるのです。

ドン・ボスコが「天の国 (il Cielo)」[「神といっしょにいる状態」のことです。それは「王としての神による支えと配慮の満ちた状態」つまり「神の国」と同じ意味です。他にも、ドン・ボスコは il paradiso という言葉も頻繁に使いますが、その場合は「楽園＝天国」という意味を備えており、「具体的な報いのある状態」を指します。ここでは「楽園＝天国」と区別するために「天の国」と訳しました］をどれほど切望していたか、私たちは知っています。彼は「天の国」に入ることをオラトリオで若者たちによろこび勇んで勧めつづけ、常に分かち合いました。

2.3 希望の特徴とは、どのようなものなのでしょうか？

2.3.1 希望とは、継続的で、迅速で、先見的で、預言的な緊張感のことです

いわゆる希望の哲学者と呼ばれているガブリエル・マルセル（註 8）は、希望が進行中の経験の積み重ねのなかに見い出されるのだ、と教えています。希望とは、未来をになう何らかの現実に信頼を置くことです。

エーリッヒ・フロム（註 9）は、希望とは受け身の姿勢で待機することなどではなく、むしろ継続しながら常に一定の緊張感を与えるものであると述べています。ちょうど、希望とは、時が訪れたときにのみ飛びかかる、身をかがめた虎のようなものです。

希望をいだくことは、いまだに起こっていないあらゆることに常に警戒することです。

ランプを灯して花婿を待つおとめたちは希望をいだきました。ドン・ボスコは困難に直面しても希望をいだき、ひざまずいて祈りました。

希望は、あらゆるものが生まれようとしている瞬間に生じているものなのです。

希望は、用心深く、注意深く、耳を傾け、何か新しいものを創造し、地球上のあらゆるものの未来にいのちを与えるために導くことができます。

こうして、希望とは「先見の明があること」であり、「ものごとを見通す能力」であることであるのがわかります。希望は、いまだ生じていないものにまで私たちの注意を集中させ、何か新しいものを生むのに役立ちます。

2.3.2 希望は未来への賭けです

希望がなければ刷新も未来もなく、あるのは不毛な快楽主義にこだわるような刹那的な現在だけです。

希望をいだく人は楽観主義者で、悲観主義者は本質的にその反対であると考えられることがよくあります。しかし、そうではありません。何よりも、希望と楽観主義とを混同しないことが重要です。希望は気分や感情や傷つきやすい性格には決して依存することがないので、はるかに深みのあるものです。**楽観主義**の本質（L'essenza dell'ottimismo）は、生来の積極性です。楽観主義者（un ottimista）は、物事が何らかの形で善くなるという信念をいだいて生きています。楽観主義者にとって、時間の感覚は終わっています。彼らは未来について考えないからです。すべてはうまくゆく、もはや他に言うべきことはありません。

それで終わりなのです。

逆の場合ですが、**悲観主義者**（il pessimista）にとっても時間の感覚は終わっています。彼らは時間という牢獄に閉じ込められており、他の可能性のある世界へ一歩も踏み出すことなく、すべてを拒否するからです。

悲観主義者は楽観主義者と同じくらいに頑固で、どちらの立場も未来の可能性に対して決して目を向けようとはしません。彼らにとって、なんらかの可能性に期待することは異質なことなので、これまでの前例のないことに立ち向かうだけの情熱が欠けています。

彼らの姿勢とは異なっているのが希望の姿勢です。希望は、限界を越えてゆけるものであり、なんらかの可能性に賭ける姿勢です。

希望があるにもかかわらず、楽観主義者は（悲観主義者と同じように）自分からは何も行動を起こしません。なぜなら、あらゆる行動には危険性が伴うので、リスクを負いたくないという理由でいっさいの行動を止めてしまいます。失敗したくないからです。

しかし、希望は新たな可能性を探り、何らかの方向を見つけようとし、いまだ知らないものに向かって進み、新しいものに向かって出航する船のようなものです。これがキリスト者の巡礼の旅の姿です。

2.3.3 希望は決して個人的なことがらとして済まされるようなものではありません

私たちはみな、心のなかで希望をいだいています。希望をいだかないままで済ますことは不可能です。しかし、実現することのない見通しや理想、単なる幻想や偽りの希望を考思い描いて、自分を欺くこともできるのもまたまぎれもない事実です。

私たちの文化、特に西洋文化にもとづく大半の状況は、個人および社会全体の生活を欺き、破壊し、取り返しのつかないほど台無しにするような偽りの希望に満ちています。

ポジティブ思考（il pensiero positivo）にもとづけば、よりしあわせに生きるには、ネガティブな考え（i pensieri negativi）をポジティブな考えに置き換えるだけで十分です。この単純なメカニズムにより、人生のネガティブな側面は完全に排除されるので、この世界は私たちのポジティブな姿勢のおかげで、まるで欲しいものを何でも提供してくれるアマゾンのマーケットプレイスのように見えてきます。

結論を述べましょう。ポジティブに考える意欲だけでしあわせになれるのであれば、誰もが自分のしあわせに対して単独で責任をになうことになります。

逆に言えば、ポジティブなことをことさらに重要視して崇拝する姿勢は人びとを孤立させ、利己的にし、おたがいの共感を破壊します。なぜなら、人びとはますます自分自身のことだけに専心し、他者の苦しみをいっさい気にかけなくなるからです。

希望は、ポジティブ思考とはまったく異なっており、人生のネガティブさを決して避けません。希望は孤立させるのではなく、むしろ団結させ、和解させます。なぜなら、希望の主人公は、自分のエゴに集中して自分自身だけに固執している私ではないからです。希望が生ずる秘訣は「私たち」という共同体の協力関係なのです。

したがって、希望の兄弟は慈愛であり、信仰であり、超越すること［この世の限界を超えてゆくこと］なのです。

3. 宣教活動の土台としての希望

3.1. 希望とは、物事に対して責任をともなって応えることへの招きです

希望は贈りもの（un dono）です。そのように、旅の途上で出会うあらゆる人に伝えるべきです。

このことを聖ペトロは明確に述べています。「あなたがたのなかにある希望について説明を求める人には、いつでも弁明［(la ragione）理由づけをすること］できるようにしておきなさい」(註 10)。彼は、私たちに対して、恐れることなく、日常生活をとおして行動し、希望の理由を述べる［弁明する］よう招いています。この「弁明（理由)」という言葉には、サレジオのこころ（精神）がどれだけ込められていることでしょう。理由を述べること（弁明すること）はキリスト者の責任です。私たちひとりひとりが希望をいだくような女性あるいは男性であるのならば、しっかりとした弁明を相手に示すことができるようになります（相手に対して、しっかりとした理由づけを示すことができるようになります)。

「私たちが心にいだいている希望について説明すること」は、イエスとその福音の「良い知らせ」を宣言すること［福音宣教］でもあるのです。

しかし、私たちが心にいだいている希望について尋ねる人に答える必要があるのは、いったいなぜなのでしょうか。そして、なぜ、私たちは希望を取り戻す必要があると感じるのでしょうか。

教皇フランシスコは、聖年開催のための大勅書『希望は欺かない』のなかで、私たちに大切なことを思い出させようとして述べています。「とにかく、誰もが実際に、生きるよろ

こびを取り戻す必要があります。人間は神にかたどり、神に似せて造られたので［創世記1・26参照］、ただ生きてゆくだけ、なんとかやってゆくだけ、物理的な現実に満足してよしとするだけ、そうしたことに甘んじてはいられないのです。そうなれば個人主義に閉じ込められ、希望がむしばまれてゆきます。そこから、心に巣食う悲嘆が生じ、ささくれて、不寛容になるのです」(註11)。

いま引用した文章は、この社会および共同体に漂う悲しみをあますところなく表しているため、私たちの心を打ちのめすほどの見解となっています。メディアや広告や政治家による宣伝、そして幸福を押し売りする数多くの偽預言者たちによって絶えず宣伝され、約束され、保証されている偽りのよろこびの底に隠された悲しみです。安易な偽りのしあわせに甘んじることは、はるかに偉大で真実で永遠につづく善に心を開くことを妨げます。永遠につづく善とは、イエスと使徒たちが「たましいの救い」あるいは「いのちの救い」と呼ぶものです。

イエスは、いのちや物質的な財産、しばしば一瞬で崩壊する偽りの安心感を失うことを決して恐れないようにと私たちに勧めています。このような多かれ少なかれ明確に表現された「質問」(若者による質問も含む）に関して、私たちの「説明［la ragione＝弁明＝理由づけ＝道理］」が課題です。若者や、私が道中で出会うあらゆる人びとに、果たして私は何を望んでいるのでしょうか。彼らのために神に何をお願いしたらよいのでしょうか。彼らの人生を、どのようにして変えたいのでしょうか。

答えはただ一つです。**永遠のいのちを即座に実現すること**です。死後に到達できるかもしれない気高い状態としての永遠のいのちだけでなく、いま・ここで可能な永遠のいのち、イエスが教えてくださった永遠のいのちです。「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです」。つまり、キリストとの交流によって、そしてキリストをとおして御父なる神と交流し、啓発される明確ないのちです（註12)。

そして、私たちにとっての際立った教育活動において、永遠のいのちへの旅路を進む際に常に若い世代に同行するという任務があります。若い世代に同行することはサレジオ家族としての私たちの使命です。それでは、私たちの使命の原動力はいったい何でしょうか。私たちの原動力は常に「私たちの希望としてのキリスト」です。サレジオ家族による教育の使命は、実際に、常に希望を中心にすえることなのです。

結局のところ、神がもたらす希望は決して自分だけのものではありません。希望は常に他者に向かうものです。希望は私たちを孤立させるのではなく、私たちを支え、真実と愛

のなかでお互いに育み合うようにうながします。

3.2 希望とは、キリスト者の共同体を勇気づける問いかけです

勇気と希望とは、実に興味深い組み合わせです。実際に、希望をいだかないことが不可能であるのが真実であるならば、希望するためには勇気が必要であることも同様に真実です。勇気は、キリストと同じまなざしを備えることから生じます（註 13）。あらゆる意味で希望がないかのように思える状況に直面したとしても、そのときにこそかえって希望をいだけば、たとえ出口がないように見えるところでも何らかの解決策を見い出すことができるようになります。そして、こうした態度は何と「サレジオ的」なものなのでしょうか。

希望をいだくのは、自分自身であり、神の賜ものにおいて自分らしさを認め、自分に託されたものは決して自分のものではなく、希望を的確に次の世代に引き継ぐという使命を負っていることを自覚するできです。その際に、自分の全力を尽くして責任を誠実に果たすだけの勇気が必要です。これが神の望みです。そして、これが教会のいのちです。

これは、サレジオ会の最初の宣教師派遣に見られる態度です。

私は、ドン・ボスコによる会憲の条文への言及が非常に有益だと思います（Ritengo molto utile il riferimento all'art.）。つまりドン・ボスコによる『サレジオ会会憲』第 34 条は私たちのカリスマ的かつ使徒的な運動の核心にあるものを強調しています。

私は、多様で美しいサレジオ家族の各グループに、それぞれの憲章と規則とを再読して、ここで私が提示するのと同じ要素を再検討することをお勧めします。

その条文は「福音宣教と要理教育」と題されており、次のように書かれています。

> 「①この会は、要理教育の素朴な授業から始まりました。私たちにとって、福音宣教と要理教育は自分たちの使命の基本的な特長となっています。
>
> ②ドン・ボスコのように、私たちはすべからく、あらゆる機会に信仰の教育者となるよう求められています。したがって、私たちにとっての最高の知識はイエス・キリストを理解することであり、私たちの最大のよろこびは、イエス・キリストの秘義の計り知れない豊かさをあらゆる人びとに対して明らかにすることです。
>
> ③私たちは若者たちと並んで歩み、彼らを復活した主のもとに導き、主御自身と主の福音において若者たち自身の存在の最も深い意味を発見し、キリストにおける新しい被造物になるように成長してゆきます。

④聖母マリアは、私たちの成長のあらゆる過程において母として、そばにたたずんでくださいます。私たちは、聖母マリアのことを、信頼する者、助ける者、希望を吹き込む者として理解し、愛します」。

いま引用した条文は、神がドン・ボスコに示した「地球規模の夢」の実現に向けて、活力や機会がどのようなものであるかを表しています。そして、このストレンナでも心が高鳴る内容として響いていることを、ここに明記しておきたいと思います。

「聖年」を生きることは、まず第一にイエスが優先されるべきものであることを強調しておきます。またイエスに立ち返ることが優先されるべきであることを確認したならば、宣教に取り組む心（精神）は、私たちの希望をますます強め、イエス・キリストの人がらをあらゆる人に向けて宣言する教育的かつ牧者的な慈善活動へとつながります。こうした経緯は、イエスを優先することから生じる当然の結果なのです。これが福音宣教の核心であり、まことの宣教の特長です。

ここで教皇ベネディクト 16 世による最初の回勅『神は愛』の冒頭の言葉を思い出しておくことが重要となります。

> 「人をキリスト信者にするのは、倫理的な選択や高邁な思想ではなく、ある出来事との出合い、ある人格との出会いです。この出会いが、人生に新しい展望と決定的な方向づけを与えるからです」(註 14)。

したがって、「キリストとの出会い」は優先的なことがらであるとともに、もっとも基本的なものでもあります。その際、私たちはキリスト教の教えの「単なる普及」を目指すものではなく、むしろ若者たちに神を伝え、若者たちといっしょに神を理解し、若者たちといっしょにあらゆることを経験することで「キリストとの出会い」を生きることになるのです。それゆえ、「キリストとの出会い」は、私たちを「若者たちの人生を導くまことの『秘義伝授者』[秘密の奥義を伝える者。師匠から弟子へと重要な伝承を託すことが「秘義伝授」（師資相承）と言われています]」（veri “mistagoghi” della vita dei giovani）となるようにうながす、神との深い個人的な関わりの経験なのです。

3.3 «DA MIHI ANIMAS»（我にたましいを与えよ）——宣教者の「こころ」

ドン・ボスコは自分の部屋の前を通り過ぎる若者たちが読めるように目立つ場所に常に標語を掲げました。「我にたましいを与えよ、他のものは取り去りたまえ」(Da mihi animas

cetera tolle.）――その言葉はドメニコ・サヴィオにとって特に印象に残るものでした。

この標語からは、二つの優先事項を見事に組み合わせる［①=②］姿勢が伝わってきます。つまり、ドン・ボスコの生涯を導いた基本的なバランス感覚［①=②］が備わっています。このことは重要なことであり、まさに私たちが「一致の恵み［①=②］」（“grazia di unità”）と呼んでいるもので、常に①「心の内面の深まりを目指す」とともに②「活発に使徒的な活動をつづけること」を可能にします。

もしも心のなかに神の愛が欠けているなら、どうしてまことの牧者としての愛があると言えるのでしょうか。そして同時に、使徒たちが隣人のなかに神の顔を発見しないなら、どうして神を愛していると言えるのでしょうか。

ドン・ボスコの生き方の秘訣とは、サレジオの精神を特徴づける独自の「神および姉妹や兄弟に対する愛の動き」（«movimento di carità verso Dio e verso i fratelli»）（註 15）を個人的に経験したことによるものです。

3.3.1 宣教者の心がまえ

ドン・ボスコの生涯を調べれば、「使徒」および「遣わされた者」として生きる際の態度が明らかになるような重要な夢が二つ見つかります。

- ①まず**「9 歳のときの夢」**では、イエスとマリアが、まだ子どもだったジョヴァンニに対して、謙遜で、強く、たくましくなり、従順に知識を得るよう望むとともに、若者の心をつかむために常に親切であるように求めます。ジョヴァンニはマリアのことを常に教師であり、導き手として見なす必要がありました。

-②次に**「バラが咲き誇る棚の下の道を進む夢」**では、サレジオ会での生活における「情熱」を示し、「苦行と慈愛とによって成り立つ『善良な靴』」（le “buone scarpe” della mortificazione e della carità）［靴は、左足にはくものと右足にはくものが両方そろう必要があります。苦行と慈愛がそろうことで「善良な靴」の 1 セットが成立します］を履くことを求めています。

3.3.2 再認識、再考察、再起動（再出発）

ドン・ボスコによる「はじめての宣教師派遣の 150 周年」を祝うことは、素晴らしい贈りものです。次に示すことが理解できるようになるからです。

- **⑴神を再認識しつつ感謝すること。**――神を再認識するならば、私たちは素晴らしい成果としての父親らしい性質を理解できるようになるからです。神が再認識がなされなければ、私たちには他者を受け容れる能力は決して備わりません。個人的および共同体的な生活における神からの贈りものを再認識できないときは、いつでも、贈りものは無意味になるばかりか、私たちは神に感謝せずに「贈りものを勝手にひったくる」ことになるという意味で、重大な危険に陥ることになるからです。

- **⑵「永遠につづくものはない」という事実を、再考察すること。**――忠実さには、神から来る視点と「時代のきざし（“segni dei tempi”）」［時のしるし］を読むことへの従順をとおして鍛えられる能力とが含まれています。永遠なものはありません。個人的および共同体的な観点から、まことの忠実さとは、主が私たちひとりひとりに対して何を求めているのかを認識し、鍛えあげる能力です。したがって、再考察することは、信仰と生活とが一体となる創造的な行為となります。自分自身に問いかける瞬間です。主よ、この人やこの状況について、解釈するために神の心を備えることを要求する「時代のきざし」の光のなかで、あなたは私たちに対していったい何を伝えたいのでしょうか。

- **⑶再起動すること、つまり毎日くりかえされる再出発。**――再認識は、はるか先を見据え、新しい挑戦を歓迎し、希望をいだいて使命を再起動することにつながります。使命とは、キリストの希望を、信仰に結びついた明確で意識的な再認識とともにもたらすことです。これにより、私が見て経験するものは「私のものではない」と再認識することができるようになります。

4. 具体的に日常的な生活に反映される聖年と宣教の希望

4.1 あかしを求める日常生活における強さとしての希望

聖トマス・アクィナスは「希望は慈善につながる（Spes introcit ad caritatem）」と書いています。希望は私たちの生活や私たちの人間性に慈善に導き、慈善を行うための素質を与えます（註 16）。慈善を行うことが正義であり、社会活動の始まりです。

希望には、あかしが必要です。私たちが他者の前にいることが宣教の核心です。なぜなら、宣教がいのいちばんに何かをすることなどではないからです。宣教とは、むしろあかしなのであり、しかも経験を積み重ねた人によるあかしなのであり、経験したことを物語るのがあかしびとだからです。あかしびとは記憶のにない手であり、出会う人からの質問

を受け容れて、相手に驚きの念を呼び起こします。

希望をあかしするには共同体が必要となります。あかしは共同体全体で責任をもって行うわざなのであり、幅広い影響をもたらします。あかしは、私たちそれぞれの人がらが誰かに影響をおよぼすのと同じように、他者に対して染みわたるものなのです。なぜなら、なにかを物語ることは主とのきずなを強めることだからです。

宣教の際に物語られる希望は、大人と若者のあいだで伝えられるものであり、ある世代から次の世代へと引き継がれるべきものです。これが、未来への道です。消費主義は私たちの文化に巣食って未来を食い尽くします。消費をあおる主張の数々は、「いま・ここ」にあるあらゆるものごとを、「すべて、そして即座に」消滅させます。しかしながら、未来を消費することまではできません。自分以外のものを自分のものにすることはできません。他者を自分のものにすることはできないのです（註 17）。

未来を築きあげる際に、はっきりと約束をして、その約束を守りぬく能力が希望なのです……約束を守りぬくことは私たちの世界では大変重要なことであるにもかかわらず、まれなことでもあるのです。約束することが希望することであり、動き出すことです。だからこそ、前にも述べたように、希望は旅することであり、旅の活力そのものとなります。

4.2 忍耐することと待つことのわざとしての希望

あらゆるいのち、あらゆる贈りもの、あらゆるものには成長するための時間が必要です。神の賜ものも成熟するまでに時間がかかるのです。だからこそ、あらゆることが突発的に起こり、時間や人生を慌ただしく「消費」する現代において、私たちは忍耐の美徳を培うよう求められているのです。なぜなら、希望は忍耐をとおして実を結ぶものだからです（註 18）。実際に、希望と忍耐とは密接に結びついています。

「希望」には、じっと待つ能力、つまり成長期の苦労をじっくりと「忍耐」する能力がともなうので、あたかも「一つの美徳（希望）が別の美徳（忍耐）につながる」ようです。

希望が現実となり、完全なかたちで現れるためには、忍耐が必要です。奇跡的に瞬時に現れるものなどは何もありません。なぜなら、あらゆることは時間の法則に左右されているからです。それゆえに忍耐とは、種をまき、まいた種が成長して実を結ぶのをじっくりと待つことを知っている農夫のわざなのです。

希望は、じっと待つこと、じっくりと期待することから始まり、私たちそれぞれの人がらを鍛えあげ、意識的に生きることをうながすような期待の姿勢として経験されます。じ

っと待つこと、あるいはじっくりと期待することは、人間の経験のなかで非常に重要な要素です。人間は待つ方法を知っており、常に待つという次元のなかで生きています。なぜなら、人間というものは意識的に時間の海のなかで生きている生きものだからです。

人間にとって、じっと待つことあるいはじっくりと期待することは、時間のまことの尺度なのであり、数値や時系列で表せるものではありません。私たちは、待ち時間を計算すること、1 時間待った、電車が 5 分遅れている、インターネットがクリックに反応するまでに 14 秒間も待たされた、などと、うそぶくことに慣れてしまっています。しかし、このように何でも測ってしまうと、待つことの意味深さが歪められ、計測されたデータと現実の自分や待ちものとが分裂するような状況が生じてしまいます。じっと待つことは、それ自体では何の実りももたらさないものに思えます。しかし、実に、じっと待つことは、関係を深めることであり、つまり関わりのかけがえのなさを経験させてくれるものです。

希望をいだく者だけが忍耐することができるようになります。希望をいだく者だけが、人生がもたらすさまざまな状況に「耐える」ことができるようになるとともに、「下から支える」ことができるようになります。忍耐する者は、じっと待つことによって、希望をいだくこととなり、そしてあらゆることにも耐えることができるのです。なぜなら、忍耐づよい者たちの努力にはじっと待つという感覚や待つことの緊張や待つことの愛の活力がみなぎっているからです。

忍耐づよく待つことが素晴らしいものだと奨励されたとしても、実際には疲労や労働や苦痛や死の経験さえもが伴うことを私たちはよく知っています（註 19）。疲労や苦痛や死に直面する者は、時間があるということがあやふやな幻想であることに気づかされて、時間の意味や時間の価値や人生の意味や価値がガラガラと崩れ去る経験を迫られることになります。自分の不安定さが露呈されるわけです。これは、まさに否定的な経験なのですが、疲労や苦痛や死は人生の時間のほんとうの意味を再発見させる機会にもなり得るため、肯定的な経験でもあるのです。

そして、それでもあきらめずに、もう一度、「私たちの心のなかにみなぎる希望を告げ知らせる」ことこそが、イエスをあかしすることなのであり、彼がもたらした「良い知らせとしての福音」の宣言となるのです。

5. 私たちの希望のはじまり——神からドン・ボスコへ

エジディオ・ヴィガノ師は、私たちの豊かな伝統を引用し、神との関わりによって明らかとなる徳に照らして解釈されるサレジオ精神のいくつかの独自の特長を強調しながら、

希望という主題についての興味深い考察を修道会およびサレジオ家族に対して提供しました。彼は、特に扶助者聖母会の総会に参加する者たちのために、「ドン・ボスコによる 10 個のダイヤモンドの夢」を解説することで、希望の意味を明らかにしたのです（註 20）。

ヴィガノ師によって提案された内容の深さを考えると、ドン・ボスコの第 7 代目の後継者が、私たち全員が生きるよう求められていることを、もう一度、希望を手がかりにして思い出させてくれたことは善き貢献であり、有益なことです。

5.1 私たちの希望の原点としての忠実な神

5.1.1.夢についての簡単な言及

1881 年 9 月 10 日の夜、サン・ベニーニョ・カナヴェーゼでドン・ボスコが見た驚くべき夢の物語については、サレジオ会員ならば誰もがよく知っています。その夢の構成を、ここで簡単に振り返ってみましょう（註 21）。

夢は三つの場面で展開されます。まず、**最初の場面**では、主人公がサレジオ会員の横顔を体現しています。マントの前面には五つのダイヤモンドがついています。胸のところについている三つのダイヤモンドは「信仰«Fede»」、「希望«Speranza»」、「慈愛«Carità»」を表しています。そして、肩についている二つのダイヤモンドは「仕事«Lavoro»」と「節制«Temperanza»」を表しています。さらに、背面には五つのダイヤモンドがついており、「従順«Obbedienza»」、「清貧の誓願«Voto di Povertà»」、「報い«Premio»」、「貞潔の誓願«Voto di Castità»」、「断食«Digiuno»」を表しています。

福者フィリッポ・リナルディ師は、10 個のダイヤモンドを持つ人物を「まことのサレジオ会員のモデル」と呼んでいます。

次に、**二番目の場面**に登場する人物は不品行のモデルを表しています。そのモデルのマントは「色あせ、虫に食われ、ぼろぼろになっていました。ダイヤモンドの代わりに、複数の害虫がつけた大きな穴が開いていました」。

この非常に悲しく憂鬱な場面は、「まことのサレジオ会員とは正反対の姿」を見せるためのものであり、言わば「サレジオ会員としての理想に反する者」を示しています。

さらに、**三番目の場面**では、「金と銀の糸で織り込まれた白いマントを着たハンサムな若者が、堂々とした魅力的な風貌で登場しています」。彼はメッセージのにない手です。彼はサレジオ会員に「耳を傾け」、「理解し」、「強く勇敢でありつづけ」、「言葉と生活によって

あかしする」とともに、「新しい世代を受け容れて育成することに細心の注意を払い」、「修道会を健全に成長させる」ようにうながしています。

いままで眺めてきた夢の三つの場面は活き活きとしており、刺激的です。夢に登場する人物たちは、サレジオ会の霊性を機敏に、個人化して、劇的に統合したものを私たちに示しています。ドン・ボスコの心のなかで、サレジオ会員たちの召し出しの特長の重要な基準枠が夢というかたちをとおして結晶化されたのです。

したがって、夢に登場する人物像は、よく知られているように、前面に希望のダイヤモンドを備えています。このことは、完全に創造的な生活、つまり特に若者の救済のための実践的な活動を毎日計画することに専心する生活において、上からの助けが確実に得られることを表しています。神とのつながりにおいて明らかとなる美徳に結びついた他の象徴とともに、賢明で楽観的な人物の姿は、彼らを活気づける信仰によって際立っています。ダイナミックで創造的な人物像は、彼らを動かす希望によって際立っているのです。そして、常に祈りを捧げる善良な人間としての人物像は、彼らに染みわたっている神の慈愛によって際立っています。希望のダイヤモンドに対応するように、人物像の背面には「報い」のダイヤモンドが備わっています。

希望とは、サレジオ会員にとって神のおはからいのみなぎる愛の充満状態を創り上げるための活力や活動を燃え立たせるものです。その際、キリストおよびマリアによる仲介や執り成しをとおしてもたらされる神のたすけに信頼して前進することが欠かせません。日々のたゆまぬ努力を決しておろそかにせずに、ひたすら身を捧げて熱心に生きることがサレジオ会員の生き方なのです。一方で、「報い」というダイヤモンドは、ドン・ボスコのあの有名なことわざである「天国をひとかけらでも味わえれば、すべてが埋め合わされます」[「天国のひとかけらが、すべてを補って、あまりある」とも訳せるでしょう]という呼びかけにのっとって、必要以上のあらゆる禁欲的な修行の努力に決して染まることなく、かえって他者を愛情深く活気づけるほどの一貫した良心的態度を強調すべきことも忘れてはならないのです（註 22）。

5.1.2. 希望の「巨人」としてのドン・ボスコ

サレジオ会員について、ドン・ボスコは次のように述べています。サレジオ会員とは、「神の栄光とたましいの救済のために必要ならば、寒さや暑さ、飢えや渇き、疲労や軽蔑を耐え忍ぶ覚悟ができている」（註 23）者です。この厳しい修徳の力量（la capacità ascetica）を内面から支えているのは、「報いとしての楽園＝天国（il paradiso）」の発想です。サレジオ

会員は働くときも、生活するときも、いつでも心のなかで「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」を思い描いているのです。「私たちがすることすべて、義務、仕事、悩みや苦しみにおいて、私たちは決して忘れてはなりません……神の名のためになされたいかなる小さなことでさえも決して忘れ去られることはありません。神が適切な時に豊かな報酬を与えてくださることに信頼する姿勢がサレジオ会員には備わっています。人生の終わりに、神の裁きの座の前に立つとき、神は慈愛深く輝きながら次のように言うことでしょう。「よくやった、忠実な善いしもべよ。あなたは小さなことに忠実だったから、私はあなたに多くのことをまかせよう。さあ、主人とよろこびをともにしなさい」（マタイ 25・21）（註 24)。

「あなたがたが働きずめで疲れを感じたり、たとえ悲しみのまっただなかにいて抜け出せなかったとしても、落ち込む必要はありません。なぜなら、すでに私たちのために天には大いなる報いが蓄えられていることを決して忘れてはならないからです」(註 25)。そして、サレジオ会員が働きすぎて疲れ果てることは修道会全体の勝利であるとドン・ボスコが述べるとき、報いには兄弟愛のまじわりという側面も含まれていることがわかります。そのような連帯感は、すでに、ほとんど「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」における共同体の感覚を先取りして見せてくれているように思われてならないのです。

「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」という発想および「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」をたゆむことなく意識しつづける継続的な努力は、ドン・ボスコの典型的な霊性および教育の包括的な考えにもとづくものであり、サレジオ会員の活動の推進力となる価値観の一つです。「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」は、究極的な目標に向かって活き活きと前進するたましいの根本的な本能に光を当てることで、巡礼の旅を促進します。

世俗化が進み、神の感覚が徐々に失われつつあるこの世界において、特に豊かさと確実な進歩により、私たち自身および私たちといっしょに旅する若者たちにとって、もはや「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」を見上げることは妨げられています。それゆえに、日々の仕事において実践される修徳主義への献身（un impegno di ascesi vissuto nel lavoro quotidiano）を維持することで、「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」へのあこがれを育む必要性を感じさせないような頑固な誘惑に抵抗することが重要となります。そして、人間のありのままが聖なる性質であると考える発想や現世だけでもじゅうぶんな理想を見い出せると信じこむような、安易で優雅な浅薄主義にのっとって、現世を愉しむ生き方に人びとの注目度が高まっています。しかしながら、現世主義者の生き方は希望とはまったく逆のしろものにすぎません。

ドン・ボスコは希望をいだいて生きる偉大な人物の一人でした。それを証明する要素は

数多くあります。彼のサレジオ精神は、聖霊のこの大胆なダイナミズムの特徴である確信と勤勉さとによって完全に満たされています。

ここで少し立ち止まって、ドン・ボスコがどのようにして人生における希望の活力を二つの長所によって表現できたのかを思い出してみましょう。二つの長所とは①「個人的に聖なる者に成長すべく努める献身」および②「他者を救い出すことに向かう使命」です。あるいはむしろ、ここに彼の精神の中心的な特長があるのですが、実は一つの出来事［①＝②］なのです。つまり、「他者の救済を目指すことで実現する個人の聖化」［①＝②］という事態です。私たちサレジオ会員は三つの「S」という有名なことわざを覚えているはずでしょう。Salve, salvando salvati（今日の言葉で言えば、「こんにちは！他者を救うことで、あなた自身も救われる」のような挨拶）（註 26）。これは単純な記憶術であり、教育的な標語なのですが、意味が深く、①「個人の聖化」と②「他者の救済」という二つの長所がいかに密接に結びついているかを示しています。

それから、「仕事」と「節制」とを組み合わせることによって、ドン・ボスコは希望を、つまり②「自分の聖化（＝他者の聖化）」と①「他者の救済（＝自分の救済）」とのたゆまぬ働きのための具体的で日常的なプログラムとして経験したことがわかります。神の秘義を熟慮するうちに、彼は信仰にもとづいて、言わく言いがたいほどの神による救いの計画を優先するようになりました。彼はキリストを人類の救世主であり歴史の主であるとみなすとともに、聖母マリアをキリスト者の助け手とみなしました。そして彼は教会を救いの偉大な秘跡とみなし、自分自身のキリスト者としての成熟とともに、困窮する若者たちをも「まだ」未開拓な状態の幅広い領域とみなしました。そのため、彼の心は「私に若者たちひとりひとりのたましいと関わらせてください」という叫びをあげさせたのです。どうか、主よ、私が若者たちを救い、若者たち以外のあらゆることがらを私から取り上げることをおゆるしください、というドン・ボスコによる切実な叫びが響きます。彼にとって、キリストに従うことと青少年に関わることとは連続した唯一の使命なのであり、彼の心のなかでは、人生そのものを支えている生きがいを使命の遂行のためだけに燃やし尽くすほどの情熱に満ちた激しい神の慈愛に満たされた愛情の爆発となり、神と若者との融合を成し遂げたのです。

キリスト教の希望の次元は、「すでに（“già”）」と「まだ（“non ancora”）」との二つの方向性を組み合わせたものであることはよく知られています。つまり、現在あるものと進行中のものとがあり、たとえ「まだ」完全には現れていなくとも、「すでに」いまもなお希望は現れ始めています［ヨハネの第一の手紙 3 章 2 節などでも「すでに」と「まだ」が登場します］。

5.1.3. ドン・ボスコがいだいた希望の特徴

⑴「すでに」という確信――希望の一番目の構成要素

神学の研究の積み重ねによる成果を参照すれば、希望の正式な対象がいったい何であるのかがわかります。希望が発動されるのは、私たちが相手を助け、相手を支え、相手を世話する神が確かにいてくださることに対して深い確信をいだくときなのであり、つまり聖霊の力に対する心の底からのゆるぎない信頼感があるときなのであり、聖パウロとともに「私を強めてくださる方によって、私は何でもできるのです」と叫ぶことを可能にする、勝利者キリストとの篤い友情であると答えることができるようになります（フィリピ4・13）。

したがって、希望の一番目の構成要素は「すでに」という確信なのです。希望は、人類の歴史の変遷のまっただなかに神が救いをもたらしておられるという確信をいだくことなのであり、教会と世界における聖霊の力に信頼して、歴史におけるキリストの王権を受け容れて、私たちの心の内に復活のいのちを始めさせた洗礼の価値を考慮して、信仰の働きを活かすようにうながします。

こうして、希望の一番目の構成要素は、慈悲深い救いをもたらす父親としての神の本質にもとづくものであるとともに、御父からつかわされた御子イエス・キリストがすでに私たちのために行ったことにもつながっており、しかも聖霊による新たな時代の始まりとしての聖霊降臨・洗礼・秘跡・教会での生活・召命の個人的な呼びかけをとおして、すでに私たちの心の内にあるものに対する信仰の働かせ方なのです。

信仰と希望とが私たちの心のなかで交流し、その原動力がおたがいを活性化するとともに補い合うことで、まさに聖霊の力の創造的で超越的な雰囲気のなかで私たちを活かしつづけるということを、絶えず思い起こす必要があります。

⑵「まだ」完成されてはいないことを、はっきりとわきまえる――希望の二番目の構成要素

希望の二番目の構成要素は、「まだ」完成されてはいないことを、はっきりとわきまえることです。この態度を身につけることは、それほど難しいことではないようです。しかしながら、希望をいだく際に、希望と対立する悪の働きに注目するだけではなく、むしろこの世の時間の流れなかではキリストの立場には欠けているもの、つまり不正で罪深いもの、そして神のはからいを充実させるうえで未熟で不完全な状態について明確に理解する

ことが必要となります。

こうした姿勢を身につけるには、ひとつの基準となる枠として、希望をいだく人にとって物事を的確に区分け［批判］しつつわきまえる［識別する］だけの能力が必要となります。それらの能力を鍛える人にとっては、神による救いの計画についての明確な理解の仕方が前提となります。したがって、希望をいだく人による物事の区分け［批判］は、単に心理的または社会学的な視点に終始するようなものではなく、むしろ「新しい被造物」という発想の神学的な領域に従うものなのであり、この世の秩序をはるかに超えてゆくことなのです。そのことを言い換えれば、私たちは人文科学の研究成果を活用しながらも、それらをはるかに超える方向に踏み出して前進しなければならないのです。

「まだ」完成されていないことを自覚しながらも、希望をいだく人びとは、いったい何が悪で、何がまだ成熟していないのか、何が神のおはからいが広がるための始まり［神の国の種］であるのかに気づき、キリストの働きの歴史的な視点にもとづいて善を成長させつつも絶えず罪との闘いに身を捧げます。「まだ」完成されていない状態を見分ける能力［識別の能力］は、常に「すでに」始まっている神の働きの確実性によって測られます。したがって、特に困難な時期においてさえも希望をいだく人びとは、神が生きておられるということのしるしと、神が創造のわざをとおして実現しようとして働いている領域に私たちを導く橋渡し役を見つけるために、信仰の深まりをうながしつつふるい立たせます。これは今日において、非常に重要な資質なのです。まさに、種子が発芽して成長するのを助けるために、適切な種子を識別する方法をわきまえることが重要なのです。

このような識別の能力がなければ、どうして希望をいだくことができるでしょうか。悪の重みを完全に理解する方法を知ろうとするだけでは十分ではありません。私たちはまた、「私たちの周りで輝きわたる春」に対しても敏感でなければなりません。ですから、私たちが困難な時代と呼ぶこの時代（そして、私たちが以前経験したある程度の平穏な時代と比べると、いまは本当に困難な時代なのです）において、希望をいだくことは、この世界には数多くの善い働きもあり、ひそかに何かが成長し始めていることに気づく助けとなります。

⑶救いの勤勉さ――希望の三番目の構成要素

さらに、希望の三番目の構成要素について述べましょう。聖化・創意工夫・使徒的な犠牲をともなった具体的な取り組みによって、希望を実現する行動を起こす必要があります。私たちが成長するためには、先に「すでに」成長しているものと協力しなければなりません。私たちは緊急事態をわきまえて、すぐに行動し、自分自身と他の人びと、特に困

窮している若者たちの心のなかに巣食う悪と闘う必要があります。

「すでに」と「まだ」との識別は、決意・計画・修正・創意工夫・忍耐・不変性へと開かれた生活のなかでの実践に移される必要があります。あらゆることが決して「期待通り」になるわけではありません。むしろ、失敗・挫折・転倒・誤解もあるでしょう。キリスト者がいだく希望を生きる際にも、当然のことながら、信仰の暗闇からまぬかれることは決してありません。

5.1.4. ドン・ボスコの希望がもたらす「実り」

ドン・ボスコのサレジオ精神にとって特に重要な実り（果実）のいくつかは、私がこれまで述べてきた希望の三つの構成要素から生じます。

(1)よろこび——希望がもたらす一番目の「実り」

よろこびは、希望の最初の構成要素である「すでに」という確信から、最も特徴的な果実として生まれます。ほんとうの希望は、すべてよろこびによって爆発的に実現します。

サレジオの精神は、独自の親しさ（相手との親和性）をとおして希望に満ちたよろこびを受け容れます。生物学の分野の研究成果からも、いくつかの例を示すことができます。あらゆる人にとっての希望としての若者たちは（したがって、キリスト教の希望の秘義とのある種の類似性を示唆しています)、何よりもよろこびを切望しています。そして、ドン・ボスコが若者を救うために、希望に気づかせる際に、よろこびの雰囲気をうまく優先しているのがわかります。彼の学院で育ったドミニコ・サヴィオは、「私たちは、非常に陽気でいることに聖性を見い出します」と述べました。その際に、この世間において典型的に見られるようなうすっぺらで表面的な陽気さではなく、むしろ心の奥底からわきおこるよろこびを大切にする必要があります。そのようなほんものの陽気さはキリスト教信仰の勝利の土台なのであり、救いのよろこびによって爆誕する希望による調和の姿なのです。最終的には、信仰と希望との深い味わいから生じる実りがよろこびなのです。

もはや、できることなど、ほとんどありません。私たちが悲しく、みじめなのは、自分たちがうすっぺらで表面的な態度でしか生きられないからです。キリスト教の歴史において、悲しみというものがあることはわかっています。イエス・キリストもまた、悲しみを経験されました。ゲッセマネで、彼のたましいは死ぬほどに悲しみ、まさに血の汗を流すほどでした。このような悲しみは確かに、卑俗な私たち人間の悲しみとは別の種類の悲し

みなのでしょう。ともかく、シスター方がよく陥ることなのですが、自分が誰からも決して理解されていないとうそぶいたり、他の人が自分のことをまるで考慮に入れていないと思いこんだり、寝ても覚めても冷たくあしらう姉妹たちが自分の資質に嫉妬したり誤解したりしている、などの印象をともなって実感されるような苦しみや憂鬱は、自分の心のなかで決して養ってはならない悲しみの姿です。このような卑俗な悲しみは、神が私とともにいて私を愛しているのだから、たとえ他の人が私のことをぞんざいに扱うばかりで、それほど考慮してくれなかったとしても何の問題もない、とサバサバとやり過ごすだけの度量の大きな希望を心にいだく姿勢とが対比されなければなりません。

サレジオの精神におけるよろこびは、日常的な雰囲気です。よろこびは、明るい未来を希望する信仰につちかわれた、信頼に満ちた希望から生じます。言い換えれば、この世界に打ち勝つ勝利を私たちの心のなかで勇猛果敢に宣言する聖霊のダイナミックな性質から生じます。……まさに、よろこびは、私たちが信じ、希望するものを証言するために不可欠な要素なのです。

よろこびこそが、何よりもまずサレジオの精神なのです。よろこびを排除して、ただ修道誓願を必死に遵守して苦行に身をやつす姿勢などはサレジオの精神ではありません。希望をいだくことは、また、ときとして苦行を実践するように私たちを導くこともありますが、その場合の苦行は高く飛ぶための有益な飛行訓練なのであり、決して刑務所で発狂している者に対する鎮静剤注射などではありません。ですから、希望をいだくことによって数多くのよろこびが生ずることを、わきまえておく必要があります。

この世界では、刺激的な感覚に満ちた生活の仕方によって限界と混乱を克服しようとする態度が蔓延しています。感覚的な快楽の促進と満足、刺激的な映画、エロティシズム、麻薬などがあちらこちらに広がっています。そのような強烈な刺激に頼るだけの感覚的な生活は、まるで意味をなさないように見える暮らしの牢獄状態から逃げるための、つかのまごまかしに過ぎず、「神のもとへと高められる聖性に満たされた姿をおちょくるような風刺画［戯画、ポンチ絵］（una “caricatura di trascendenza”.）」に近いものなのです。

⑵忍耐――希望がもたらす二番目の「実り」

希望の二つ目の「実り」は、「まだ」という理解の仕方から生じる「忍耐」です。あらゆる希望の奥底には忍耐の賜ものが宿っています。忍耐は決して欠かせません。忍耐はキリスト者の基本的な態度なのであり、「まだ」物事が実現していないという性質のことです。つまり、たとえ私たちが問題や困難や暗闇にさいなまれる状態であっても、希望と結びつ

いている忍耐によって乗る越えることができるようになります。死すべき存在であり、はかないものに浸りながらも、復活を信じ、信仰の勝利のために努力して生きるには、希望をもたらす忍耐を心の底で養うことが必要になります。

キリスト教における忍耐の最も気高い表現は、イエスが特に受難から死に至るまでのあいだに経験したものでした。イエスの心の奥底では希望が燃料となって愛の炎が燃えていたからこそ、あらゆる苦難も忍耐できるようにったという事実を、彼の受難と死から学びましょう。忍耐の特長は、積極的な自発性や行動なのではなく、むしろ神の計画が達成されるようにひたすら耐え忍ぶ意識的な受容の姿勢および徳の高い受動性なのです。

ドン・ボスコのサレジオ精神は、しばしば私たちに忍耐の重要性を思い出させます。ドン・ボスコは『サレジオ会会憲』の序文において、聖パウロに言及しながら、この世で耐えなければならない苦しみは、私たちを待ち受ける天国での報いと比べたら些細なものでしかないことを回想しています。彼はよくこう言っていました。「だから勇気を出しなさい。忍耐力が弱りそうになったら、希望に支えられるようにしましょう」(註 27)。「天国での報いに対する希望こそが、私たちの忍耐を支えてくれるのです」(註 28)。

親しみ深い謙遜な母であるマザレッロもドン・ボスコと同じように忍耐することの大切さを強調しました。彼女の最初の伝記作家の一人であるマッコノは、希望が彼女の苦しみや弱さや疑いを支え、死の瞬間に彼女を元気づけたと述べています。「彼女の希望は非常に活き活きとしており、活発なものでした。私には、彼女があらゆることに対する希望に突き動かされているとともに、他の人の心の底にさえも希望を根づかせようとしていたように思えます。彼女は私たちに、日々のささやかな十字架をうまく背負い、あらゆることを非常に純粋な意図で行うことを求めていました」と、あるシスターが証言しています（註 29)。

希望は忍耐の母であり、忍耐は希望を防御する盾なのです。

⑶相手を育む感覚（教育的な感受性）——希望がもたらす三番目の「実り」

希望の三番目の構成要素である「救いをもたらす勤勉さ」から、別の実りが生まれます。その実りは「相手を育む感覚」(教育的な感受性）です。「相手を育む感覚」(教育的な感受性）は、自分自身の聖化（キリストに従うこと）と他者の救済（使命）という両方の要素をつなぐ連携に取り組むことです。「相手を育む感覚」(教育的な感受性）は具体的なものであるとともに慎重なものでもあり、絶えざる努力をともないます。「相手を育む感覚」(教育的な感受性）については、ドン・ボスコが具体的な方法論としてうまく説明しており、特に次の諸

点に注意が払われています。

- **①慎重さ（賢慮、あるいは「聖なる狡猾さ」）**——物事に取り組む姿勢や問題解決の仕方について、ドン・ボスコは決して完璧なふりをすることなく、むしろ謙遜で控えめで目立たないかたちで、さりげなく相手を支えていました。彼は、よく「最善をねらって行動することは、善の敵である」と言っていました（註 30）。

- **②大胆さ［勇猛果敢な姿勢］**——悪が実行に移される際に実行部隊は巧妙に組織化され、闇の子らは非常にずるがしこく周到な計画を練って知性を最大限に活用して動きます。たしかに福音書では、光の子らも、もっと狡猾で勇敢でなければならないと教えています。したがって、この世界で働くためには、まことの慎重さ、つまり、善のためならば何ものをも決して恐れずに行動するほどの強靭さを保ち、機敏で、タイムリーで、洞察力のある「美徳の推進者（auriga virtutum）」としての資質を身につけなければなりません。

- **③寛大さ［度量の大きな心もち、豪快な気前よさ］**——私たちは、自分の家に閉じこもって室内の壁ばかりを朝から晩まで眺めているだけでは、決して何も成し遂げることができません。私たちが、この世界を救うために主から召し出しを受けたのです。つまり、私たちには宇宙飛行士や科学者よりも重要な歴史的な使命があるのです。……私たちは、人類を完全に解放する任務に尽力しています。それゆえに、私たちのたましいは、非常に広い視野で物事を眺めるべく、常に開かれていなければなりません。ドン・ボスコは、私たちが「時代の最先端の進歩に寄与する最前線に立つ」ことを望んでいました（彼がこれを言ったとき、通信メディアを最大限に活用する計画を心の底にいだいていました）。

私たちは、若者に対して十二使徒のような責任のある任務を授けて送り出すドン・ボスコの寛大さをよく理解しています。たとえば、アメリカ大陸に向かった最初の宣教師たちのことを考えてみてください。このときに派遣されたサレジオ会員も扶助者聖母会員も、まだまだ少年少女に過ぎませんでした。

ドン・ボスコは常に巨大な視野をもって活動しました。彼にとってはヴァルドッコやモルネーゼの子どもたちを救うだけでは決して十分ではありませんでした。しかも、トリノの街ばかりかピエモンテ地方にとどまらず、ひいてはイタリア国内をも超えて、さらにヨーロッパ全土の境界線の内側にさえ留まることでは満足できませんでした。彼の心は絶えず普遍的な教会の精神とともに連携して高鳴っていました。なぜなら、彼は世界中に散らばるあらゆる現場で困窮する若者たちを救う責任を自分が背負っていると実感していたからです。彼はサレジオ会のメンバーに対して、教会の最も緊急かつ最大の課題としての若

者たちの苦しみが、まさに自分たちの苦しみであると感じてもらい、どこでも対応できるようにしたいと望みました。そして、彼はあらゆる計画や取り組みにおいて常に豪快な気前のよさをつちかいながらも、その実行においては、段階的にゆっくりとふるまうとともに、周囲に対しては丁寧な根回しをしつつ控えめな始め方を心がける感覚を備えていました。彼の姿勢は常に具体的であり、決して理想論をふりかざすことなどはなく、むしろ現実の状況に即していました。

ですから、サレジオ会員の顔の表情からは、相手に親しみを感じさせるように、常に豪快な気前よさがにじみ出ていなければならないでしょう。サレジオ会員は、未来への展望が備わっていなければなりません。つまりサレジオ会員は目先のことがらで手一杯になってしまうような狭い心で、決してせせこましく生きてはなりません。むしろ常に希望を心に宿しつづけているような、たましいの高貴なる気高さを備えていなければなりません。

詩人のシャルル・ペギーは、鋭い洞察力に支えられつつも、やや高圧的な筆致で次のように書いています。「降伏とは、本質的には、実行するのではなく、説明を始める行為である。臆病者は常に、くどくどと言い訳をまくしたてるやからに過ぎないからだ」と。祈りの深さによる、神との対話にもとづく果敢な決断力をともなって、絶えず現実を見すえて繊細に配慮するような謙遜な姿勢を洗練させる勇気が、常にサレジオ会員の顔の表情からにじみ出ていなければなりません。ドン・ボスコは、最善な状態からほど遠いときでさえも、そのまま善を実現するために全力で身を捧げることを決意していました。彼は、自分にとっての使命の果たし方は、おそらく無秩序の状態から始まり、その後、ゆっくりと秩序を形作る方向に踏み出すような傾向があったと、よく述べていました。

希望は、深い黙想の積み重ねによって、感謝の熱意を帯びて成長し、さらに「神への信頼」から生じる楽観主義ともあいまって、サレジオ会員の顔の表情に神の子としてのよろこびをもたらします。また、率先して行動する勇気、忍耐と犠牲の精神、段階的な教育の知恵、寛大さにもとづく、先見の明のある理想、実用主義に支えられた謙遜、狡猾な知恵も統合されつつ、独特なよろこびの笑顔が相手の心をなごませます。

5.2. 神に対する忠実さ——最期の日にいたるまで

これまで、ドン・ボスコやサレジオ家族の聖人たちおよび福者たちが生涯をかけて明確に表現した洞察をもとにして、サレジオ精神の要点を紹介してきました。これらは、私たちひとりひとりが個人的にも、サレジオ家族という共同体としても、特に若者たち、とりわけ最も貧しい青少年たちに「希望をいだくことの大切さの理由づけを的確に述べる」よ

うに求められている宣教の使命を明らかにし、あるいは（エジディオ・ヴィガノ師の言葉を借りれば）輝かせるようにうながすものです。

いまや、この世の「すぐに見える」ものを超えて、少しだけ「かいま見る」ことのできる時が来ました。希望が、私たちの人生の先に何が待ち受けているのかを理解し、「主の日」の到来に向けていっしょに努力しながら熱心に待つ勇気を与えてくれるからです。

したがって、ドン・ボスコの第七代目の後継者の率直で痛烈な分析を引きつづき紹介しながら、「報い」の観点に注目しておきましょう。

「報い」のダイヤモンドは、他の四つのダイヤモンドとともに、夢に登場する人物が着ているマントの背面に配置されています。それらは、ほとんど隠されており、まさに内側から働く力なのであり、私たちに生きるための推進力を与え、前面で目立つダイヤモンドの輝きの偉大な価値を支持しつつ保つのに役立っています。特に「報い」のダイヤモンドが「清貧の誓願」のダイヤモンドの下に配置されていることは興味深いことです。そのことは、確かに、「報い」に関連する「清貧の誓願」と結ばれているからです。

「報い」のダイヤモンドから発せられる光線のところには、次のような言葉が書かれています。「豊かな報いに心ひかれるなら、数多くの困難を決して恐れてはなりません」。「私といっしょに苦しむ者は、私といっしょによろこぶことになるでしょう」。「地上で私たちが苦しむことは何であれ、一時的なものに過ぎませんが、天国にいる私の友人たちのよろこびは永遠につづくものなのです」。

ほんもののサレジオ会員は、福音書が宣言する価値を満たすように、想像力、心がまえ、願望、人生の展望において、報いの可能性を理解しています。「彼は、いつも明るいのです。彼はよろこびを放ち、キリスト者の生活のしあわせと祝祭の感覚を他者に伝えることができるのです」(註 31)。

ドン・ボスコの家でも、私たちサレジオ会員の家でも、「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」についての話題が数多く伝えられています。「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」の話題は、いくつかの著名なことわざにまとめられることで、永い年月にわたって語り伝えられる発想でした。たとえば、次のとおりです。「パン、仕事、そして天国」(註 32)。「天国のひとかけらが、すべてを補って、あまりある」[「天国をひとかけらでも味わえれば、すべてが埋め合わされます」とも訳せるでしょう]（註 33)。これらは、ヴァルドッコやモルネーゼで繰り返し語られていた言葉です。

確かに、ほとんどの扶助者聖母会の修道者たちは、モルネーゼの精神についてアンリエット・ソルボンヌ修道女が述べた次の言葉を覚えていることでしょう。「ここが天国です。

家のなかには天国の雰囲気があります」(註 34)。その際、決して貧困が解決していたわけではありませんでした。さまざまな問題をかかえながらも、愛情に満ちた家庭の雰囲気があれば、その現場は「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」となるのです。その修道女の言葉は、まるでドン・ボスコが掲げていた看板に記された呼びかけを、まさに心からわき出るように自発的に翻訳してみせたような内容でした。「主よ、数多くのしあわせがあらんことを」(註 35)。

ドメニコ・サヴィオもまた、人生における同様の暖かくて、この世をはるかに超える独特な雰囲気を実感していました。「ぼくたちは、聖性を、とても陽気であることとして理解したいと思います」(註 36)。

ドメニコ・サヴィオやフランチェスコ・ベスッコやミケーレ・マゴーネの伝記において、ドン・ボスコは、彼らが死にゆく姿を描写しているときでさえも、この言わく言い難いよろこびを表現しようと努め、「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」へのまことの憧れを強調しました。ドン・ボスコが育んだ少年たちは、死の恐怖よりも、復活の祝祭のよろこびのほうに魅力を感じていたのでした。

報いの発想は、聖霊が確かにそこにおられるときの実りの一つなのです。つまり、信仰・希望・慈愛という最強の三つの徳がいっしょにまとまった状態で報いが実感されるのです。しかも、報いは希望と密接に結びついています。希望という報いは、神のもとから来るよろこびと歓喜とを私たちの心のなかに吹き込むとともに、人間の心のもともとの傾向に美しく調和させます。私たちは少年少女たちのあいだで生活をともにするときに、希望あふれる報いを実感することができます。若者たちは、人間がしあわせになるために生まれてきたことを本能的にもっと明確に理解しているものだからです。

しかし、若者たちのあいだでは希望を探し回る必要さえありません。まず、鏡を手に取って、自分自身を見つめてみましょう。自分の心臓の鼓動に耳を傾けるだけでよいのです。私たちは、すでに、しあわせを授かるために生まれているので、取り立ててしあわせがほしいと神に対して告白しなくてもよいのです。あらゆる人は、ほんとうはしあわせを授かる期待感のうちで生かされ始めているのです。

ドン・ボスコの家には、いつでも「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」という発想があります。「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」とは、人を単純に陥れるようなユートピア［ほんとうはありもしない架空の理想郷］などでは決してありません。「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」は、馬をだまして小走りさせるために鼻先にニンジンをつるすことなどではありません。むしろ、「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」は私たちの人生そのもの

の本来的な憧れです。そして「報いとしての楽園＝天国（il paradiso）」は、何よりも神の愛の現実であり、歴史のなかで働いているイエス・キリストの復活の出来事なのです。私たちを報いへと駆り立てるのは、聖霊がいまも生きておられるからなのです。

ドン・ボスコは、若者たちがよろこびにあふれている状況を決して軽蔑しませんでした。それどころか、彼は若者たちのよろこびを励ますことで、さらに新たなよろこびを生み出し、増やし、発展させました。ドン・ボスコの聖性を成熟させたことで有名なあの「陽気さ」は、恵みの実りとして心の底に秘められていた親密なよろこびだけではありません。「陽気さ」こそが、よろこびの源です。「陽気さ」は、人生において、遊び場において、そして祝祭の感覚などをとおして、外部にも表現されて広がりつづけます。

彼はオラトリオでの信心深い厳粛な儀式や洗礼名の祝日やさまざまな祝祭日のためにどれほど丁寧に準備したことでしょう。

彼は自分の洗礼名の祝日の祝典のときでさえも、決して主役になることはなく、むしろ皆のしもべとして全員を愉しませるための準備のために忙しく駆け回っていました。祝日があるのは、決して自分のためではなく、むしろ周囲によろこびや感謝の雰囲気を醸し出すためでした。

それでは、ここで勇気ある秋の遠足について考えてみましょう。ドン・ボスコが秋の遠足を準備するのに二ヶ月から三ヶ月を費やしたばかりか、予行練習にも十五日から二十日をかけました。そして、若者たちと長い時間をかけて語り合うことで思い出を深めるとともに腹を割って話す信頼関係をも築きあげたのです。こうして、いっしょに生きるときの「報いとしての楽園＝天国（il paradiso）」のよろこびは長い歳月をかけて、さらに広がります。何という豊かな想像力と勇気なのでしょう。トリノからベッキへと向かい、さらにジェノバやモルネーゼやピエモンテの数多くの町までを歩いて旅したのです。何十人もの若者たちといっしょに。……その長期遠征では、ゲーム・音楽・歌・演劇がふんだんに盛り込まれていました。これらの活発な活動こそが、まさに予防的なシステムを自負するドン・ボスコの教育にとっての重要な要素なのです。こうした活動は教育方法としても適切であり、ダイナミックな精神性を相手に目覚めさせ、確信に満ちた信仰・希望・慈愛を生じさせ、まさにこの地上においてさえも「報いとしての楽園＝天国（il paradiso）」の価値を自然体で受け容れさせることにつながるのです。

「報いとしての楽園＝天国（il paradiso）」は常にそこにあります。神は昼も夜も、雲があろうとなかろうと、常にヴァルドッコの空を見下ろしており、若者たちを導いていたのです。今日、報いの価値を証言することは、この世界の人びと、特に若者たちにとって緊急

性のある預言的なわざなのです。技術や産業を極度に発展させた文明は結果的に大量消費社会を生み出しましたが、そのような社会は果たして若者たちに対していったい何をもたらしたのでしょうか。快適さと目先の利益を増大させましたが、その結果として深い悲しみを生じさせてしまったのです。

とりわけ、ドン・ボスコによる『サレジオ会会憲』には、「サレジオ会員は復活の力のしるしです」と記されています。そして、「日々の生活の単純さと勤勉さによって」彼は「若者たちに『新しい天と新しい地』を宣言し、彼らのまっただなかに希望と献身とよろこびを目覚めさせる教育者」である、と書かれているのですが、こうした呼びかけは、あらゆるキリスト者にも当てはまる生き方なのです（註 37）。

モルネーゼやヴァルドッコには、安易な安楽や頑固な独裁体制も決して存在せず、すべてが自発性とよろこびとに満ちていました。今日では、技術の進歩によって数多くのことが容易になりましたが、逆に人間のほんとうのよろこびは何ら増大してはいません。その代わりに、苦悩が増し、吐き気がおさまらず、人生の意味のなさがより深刻に実感されるようなり、虚無感が蔓延し、残念ながら、特に経済的に裕福な社会では、青少年たちの自殺が増えつづけている、という悲惨な統計が大人たちの心を悲しませています。

今日、人類の大部分を依然として苦しめている物質的な貧困を解決することに加えて、若者たちが人生の意味を見つけ出し、より高尚な理想に目覚め、イエス・キリストの生き方と呼びかけの独創性を理解するのを助ける方法を見つけることが急務となっています。

あらゆる人は、実に人間の根本的な傾向を心の底に宿しており、それゆえに、しあわせになりたいと切望しつつも、しあわせになるための正しい道はもはや知られておらず、大きな幻滅だけが、まるで荒涼とした砂漠のように広がっています。

若者たちは、生きる意味を諭してくれるような重要な呼びかけをする大人たちが登場することを切望しています。しかし、適切な指導ができる大人たちが不足しているので、若者たちはますます苦しみあえぎ、自らの生きるべき義務を途中で投げ出そうとし、誰かに献身的に尽くす思いやり深さからも遠ざかろうとしています。理想を追い求め、自分の使命に対する忠実な姿勢が壊れてしまったことが、いまや社会の大問題となっており、そのすさみの状況は決して覆せないほどに決定的なものになっています。このままでは、若者たちは苦しみや犠牲を受け容れることができないと感じています。彼らは愛と犠牲との分離が勝利する雰囲気のなかで暮らしており、富の追求と達成だけを過剰に望むしかないわけです。もはや若者たちの愛する能力はしなびており、それゆえに未来を夢見る能力もまた抑圧されてしまっています。

これまで、すでに述べましたように、「報い」のダイヤモンドが「清貧の誓願」のダイヤモンドの下に置かれるのは当然のことなのです。それはあたかも、この二つがおたがいに補い合って支え合っていることを示しているからです。実際に、福音にもとづく貧しさには、放棄・苦しみ・挫折・窮乏・痛みといった現実的な視点のみならず、もっと幅広く全体を見渡すような眺めがともなっているのです。そのような眺めは、決してまやかしなどではなく、むしろ具体的であるとともに、この世の限界をはるかに超えるような明るい展望をともなっているのです。

決して落ち込むことなく、むしろ自信をいだいて明るい表情であらゆることに立ち向かうことを可能にする心の底にみなぎ活力とは、いかなるものなのでしょうか。そのような活力は、究極的には、この地上において、すでに「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」が始まっているという感覚です。この感覚は信仰・希望・慈愛から生じており、その感覚によって私たちは聖霊の働きの視点で人生全体を見渡すことができるようになるのです。

いまや緊急事態です。この世界は、天国の偉大な真実を人生をかけて告げ知らせる預言者を必要としているのです。天国を告げ知らせることは、この世での生活に疎外感を与えるような逃避などでは決してありません。むしろ、強烈で刺激的な現実なのです。

したがって、ドン・ボスコの精神においては、まるで心の上方に華麗に輝く星々に感嘆させられるように、あるいはサレジオ精神の核心に触れる美しい地平線の広がりにため息をつくかのように、「報いとしての楽園＝天国（il paradiso)」への親しみをつちかうことに常に関心があるわけです。私たちは、報いを確信しながら、あのかぐわしい祖国・神の家・約束の地を見つめながら働きつづけ、絶えず奮闘するのです。

人は、報いを得ることをあらかじめ期待して生きてしまう態度に陥る場合があります。しかも、私はこれだけ頑張ったのだから、それに見合うだけの報いを得るべきだというように、複雑な現実［神や他者の都合とからみあった自分の状況］を敢えて自分の立場で単純に理解しようと躍起になって、何が何でも報いを得ようと必死にもがきます。人間というものは、えてして、自分がこの人生において数多くの犠牲を捧げつつ数多くの忍耐を強いられるなかで生きてきたのだから、何らかの「報い」があって当然ではないか、と考えてしまうわけです。それゆえに、報いを得るということが、自分の努力と忍耐に対する何らかのごほうびや慰めを得ることでは決してないことを明らかにしておく必要があります。……ごほうびや慰めを受けるのが当然だと考えてしまうことは、あまりにも本筋からずれているのです。私たちがあまりにも強制的な態度で神に対して何らかの「報い」を要求するのならば、神を脅迫することになりかねません。しかし、神は決してそのようには働きません。神は愛の極みにおいて、人間に対して自分自身をすべて与え尽くすことしかできませ

ん。これが、イエスが言うように、永遠のいのち、すなわち御父を知ることなのです。ここで言われている「知る」とは「愛する」ことであり、神の完全なる分け前を得ることであり、地上での生活と連続している「神の恩寵」のまっただなかで、つまり神や姉妹や兄弟への愛のなかで生きることなのです。

この旅路において、私たちは聖母マリアに目を向けるよう招かれています。聖母マリアは日常生活の助け手であるとともに、母親でもあり、なおかつ先駆者でもあり、さらには救いの手を差し伸べる者としても登場します。ドン・ボスコは聖母マリアが私たちのあいだにいっしょにいてくださることを確信しており、それを思い出させるしるしを求めていました。

それゆえに、彼は聖母マリアのためにバシリカ（大聖堂）を建てました。バシリカが建立されたのは、サレジオ会の召命を活性化し広めるための中心地でした。彼は私たちの環境のなかに彼女のイメージを根づかせることを望みました。彼は使徒的な活動のすべてを彼女の執り成しに結びつけ、彼女のまことの母性的な効力について感動的に語りつづけました。たとえば、彼がニツァ・モンフェッラートの家で扶助者聖母会の修道女たちに述べたことを、私たちは思い出します。「聖母は確かにここに、あなたたちのあいだにおられます。聖母はこの家を歩き、マントで覆ってくださいます」(註 38)。

彼女に加えて、私たちは神の家に他の友人をも招こうとしています。私たちサレジオ家族の聖人たちや福者たちなど、私たちにとって最も馴染みのある顔から始まり、いわゆる「サレジオ会の家庭」に所属する人びとを招きたいのです。

私たちがこうした選択をするのは、神の偉大な家を小さな個室に分割するためではなく、もっとくつろいで、神である御父・御子・聖霊の働きに感謝するためなのです。そしてドン・ボスコを導いたキリストとマリアを記念し、創造のわざや救いの歴史について語り合えるようにするためです。それは、難解で不可解ですらある思想家の崇高な教えを聞いたことのある人びとがいだく不安感などではなく、むしろ親近感とよろこびに満ちた素朴さをともなって、私たちの親戚や兄弟姉妹や同僚や仕事仲間であった人びとと会話するためなのです。彼らのなかには、これまでの人生で会ったことのない人もいますが、私たちは彼らに親近感を感じており、いっしょに打ち解けて語り合えるという特別な自信を与えてくれます。聖ヨセフ、ドン・ボスコ、マリア・マザレッロ、ルア師、ドメニコ・サヴィオ、ラウラ・ビクーニャ、リナルディ師、ヴェルシリア司教、カラヴァリオ師と話すときが訪れるのです。さらにシスター・テレサ・ヴァルセ、シスター・エウゼビア・パロミーノなどとの親しい会話は、まさに「家のなか」でなされる家族同士の愉しい会話なのでしょう。

報いのダイヤモンドが私たちに示唆しているのは、神、キリスト、マリア、聖人とともにくつろぎを感じることなのであり、私たちの日常生活に楽園の感覚を与える家族的な雰囲気のなかで、まるで自分の家にいながらにして彼らがいっしょにいてくれるのを感じることなのです。

6. 聖母マリアといっしょに

この解説をしめくくるにあたって、ドン・ボスコが教えてくれたように、私たちは自分の気持ちとまなざしとを聖母マリアに向けるしかないでしょう。

希望には、ゆるぎない信頼が必要です。つまり、希望をいだくには、自分の身を全面的に相手にゆだねて信頼する能力が必要となるのです。

神に徹底的にゆだねることにおいて、聖母マリアは私たちにとって、まさに導き手であり教師なのです。

聖母マリアは、希望とは信頼して身をゆだねることであり、この世の人生だけでなく永遠のいのちを授かる際にも、やはり神に自分自身をゆだねることが当てはまると証言しています。

巡礼の旅をとおして、聖母マリアは常に私たちの手を取り、神に信頼する方法を示すとともに、御子イエスが伝えてくださった神の慈愛に自分自身を自由に捧げる方法をも教えてくれるのです。

聖母マリアが私たちに示してくださる方向と「航海図」とは常に同じ道筋を指しているのです。

「彼があなたに言うことを何でも行いなさい」(註 39)。この聖母マリアの呼びかけは、私たちが日々の生活において常に受け容れるべき招きなのです。

私たちは、聖母マリアの生き方そのものを眺めるたびに、報いが達成されていることに気づかされます。

聖母マリアは報いの魅力を示すとともに、報いを実現するだけの具体的な働き方を自ら体現しています。「地上での滞在を終えると、マリアはその肉体とたましいとを天の栄光に引き上げられ、主によって宇宙の元后として高められました。それは、主のなかの主であり［黙示録 19・16 参照］、罪や死を征服した御子にさらに完全に似た者となるためでした」（註 40）。

聖母マリアの口からは、聖パウロの美しい表現が読み取れます。それら数々の言葉は聖母マリアの配偶者である聖霊によって触発されたものなので、聖母マリアも確かにそれを共有しています。ここに、それらの言葉があります。

> 「誰が、私たちを罪あるものと定めることができるでしょう。キリスト・イエスは死なれた方、いな、むしろ、復活させられた方、神の右に座す方であり、私たちのために執り成してくださる方でもあります。誰が私たちをキリストの愛から引き離すことができましょう。災いか、苦しみか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か。……中略……しかし、私たちは愛してくださった方によって、これらすべてのことにおいて輝かしい勝利を収めています。私は確信しています。死も、いのちも、み使いも、支配するものも、いまあるものも、後に来るものも、力あるものも、高い所にいるものも、深いところにいるものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにおいて現われた神の愛から私たちを引き離すことはできないのです」(註 41)。

親愛なる姉妹や兄弟の皆さん、親愛なる若者の皆さん、キリスト者のたすけ手である聖母マリア、ドン・ボスコ、そしてあらゆる聖人や福者たちは、この特別な一年をとおして常に私たちのそばにいます。彼らが、聖年の歩みを丁寧にたどる私たちに寄り添い、私たちが「福音書で告げられた救い主であり、今日も教会と世界において生きつづけておられる」(註 42) イエス・キリストという人物を人生の中心に置くのを助けてくださいますように。

ドン・ボスコが派遣した最初の宣教師の模範に倣い、私たちの人生をいつでもどこでも、特に若者や最も貧しい人びとへの無償の贈りものとするように励ましてくださいますように。

最後に、心から願いたいです。今年、いっそう平和が実現し、平和を求める人類の祈りが深まり、私たちの連帯によってますます成長しますように。聖書に登場するシャロームという平和の贈りものを呼び求めましょう。シャロームは他のあらゆることがらを含み、希望においてのみ実現するからです。

皆様のご健勝を心からお祈り申し上げます。

総長代理　**ステファノ・マルトーリョ S.D.B.**

ローマにて、2024 年 12 月 31 日

註

（註 1）教皇フランシスコ『希望は欺かない――2025 年の通常聖年公布の大勅書』バチカン市国、2024 年 5 月 9 日［邦訳は、髙見三明訳、カトリック中央協議会、2024 年］。

（註 2）同上。

（註 3）ローマの信徒への手紙 8 章 39 節を参照のこと。

（註 4）ローマの信徒への手紙 5 章 3－5 節。

（註 5）『ローマ・ミサ典書』ローマ、2020 年 3 月、240 頁。

（註 6）ビョンチョル・ハン『希望の精神』ヘルダー社、バルセロナ、2024、18 頁。

（註 7）C・パッチーニ、S・トロイシ『私たちは生まれ、二度と死ぬことはありません――キアラ・コルベラ・ペトリッロの物語』ポルツィウンクラ、アッシジ（ペルージャ）2001 年。

（註 8）ガブリエル・マルセル『希望の哲学』ミュンヘン、リスト社、1964 年。

（註 9）エーリッヒ・フロム『希望の革命』チューダッド社、メキシコ、1970 年。

（註 10）ペトロの第一の手紙 3 章 15 節。

（註 11）教皇フランシスコ『希望は欺かない』9 項［髙見三明大司教の監修による邦訳を参照しており、一部をひらがなだけにして引用しました。カトリック中央協議会、2024 年、20 頁］。

（註 12）ヨハネ福音書 17 章 3 節。

（註 13）ローマの信徒への手紙 4 章 18 節を参照のこと。

（註 14）教皇ベネディクト 16 世回勅『神は愛』バチカン市国、2005 年 12 月 25 日、1 項。［邦訳はカトリック中央協議会、2006 年、5－6 頁］。

（註 15）『サレジオ会会憲』第 3 条。

（註 16）聖トマス・アクィナス『神学大全』第二集第 2 部第 17 問第 8 項（IIª-IIae q. a. 8 co.）。［邦訳は以下のとおり。トマス・アクィナス（稲垣良典訳）『神學大全』第 16 巻（Ⅱ-2、17-33）創文社、1987 年、22－25 頁所載］。

（註 17）エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限――外部性についての試論』ジャカ出版、ミラノ、2023 年を参照のこと。

（註 18）これらの考察のために、私は『厳律シトー修道会の 2024 年度の総会文書』における総長 M. G.

レポーリ師による豊かな洞察を参考にしました。その総長による『キリストにおける希望』(Sperare in Cristo）というメッセージは以下のサイトをとおして様々な言語で読むことができます。www.ocist.org

（註 19）ローマの信徒への手紙 5 章 3－5 節を参照のこと。

（註 20）エジディオ・ヴィガノ『積極的な生き方をもたらす福音的な計画』エレディチ出版社、レウマン（トリノ）1982 年 68－84 頁。

（註 21）E・ヴィガノ「サレジオ会員にとってのドン・ボスコによる 10 個のダイヤモンドの夢について」ASC 300 号、1981 年、3－37 頁所載。なお、この論文の完全版は ASC 300 号、1981 年、40－44 頁所載のものであり、あるいは、ドン・ボスコ『自伝的回想録』第 15 巻、147－152 頁所載のものである。

（註 22）ドン・ボスコ『自伝的回想録』第 8 巻、200 頁。

（註 23）『サレジオ会会憲』第 18 条。

（註 24）ピエトロ・ブライド編『創立者としてのドン・ボスコ「サレジオ会員の皆様へ」(1875－1885 年）――序文および校訂テクスト』LAS、ローマ、1995 年、159 頁（この引用元であるドン・ボスコの『サレジオ会員の皆様へ』という文書は、『サレジオ会会憲・会則』の巻末に収載されている付録でもあります)。

（註 25）ドン・ボスコ『自伝的回想録』第 6 巻、 249 頁。

（註 26）ドン・ボスコ『自伝的回想録』第 6 巻、227 頁。

（註 27）ドン・ボスコ『自伝的回想録』第 12 巻、332 頁。

（註 28）同上、331 頁。

（註 29）F. マッコノ『聖マリア・ドメニカ・マザレッロ――扶助者聖母会の共創立者であり初代総長』第 1 巻、扶助者聖母会、トリノ、1960 年、398 頁。

（註 30）ドン・ボスコ『自伝的回想録』第 10 巻、418 頁。

（註 31）『サレジオ会会憲』第 17 条。

（註 32）ドン・ボスコ『自伝的回想録』第 12 巻、443 頁。

（註 33）ドン・ボスコ『自伝的回想録』第 8 巻、200 頁。

（註 34）E・ヴィガノ「モルネーゼの精神の再発見」ASC、1981 年、62 頁から引用しました。

（註 35）詩篇 99。

（註 36）ドン・ボスコ『自伝的回想録』第 5 巻、228 頁。

（註 37）『サレジオ会会憲』第 63 条。E・ヴィガノ「よころびと希望による決意に根拠を与え、キリストの計り知れない富をあかしすること」（1994 年度ストレンナについての総長による解説）扶助者聖母会出版部、ローマ、1993 年、をも参照のこと。

（註 38）G.カペッティ『一世紀にわたる修道会の歩み』第 1 巻、扶助者聖母会、ローマ、1972－76 年、122 頁。

（註 39）ヨハネ福音書 2 章 5 節。

（註 40）第二バチカン公会議『教会憲章』59 項［邦訳は、第二バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会監訳『第二バチカン公会議公文書　改訂公式訳』カトリック中央協議会、2013 年、198－199 頁所載］。

（註 41）ローマの信徒への手紙 8 章 34－39 節。

（註 42）『サレジオ会会憲』196 条。

※2024 年 12 月 30 日に濱崎敦管区長様から邦訳版の作成を正式に依頼されましたので、即座に翻訳に取り組み、同年 12 月 31 日に完成させました。

※この翻訳は①イタリア語版と②英語版と③スペイン語版を参照することで作成されました。英語版では註のなかで、英訳本を使用して解釈した旨がいくつか記されていましたが、イタリア語版には書いていない記述ですので、この邦訳版ではイタリア語版の表記の仕方を優先して、英語版だけに記されていることわり書きを省きました。なお、ラテン語で記されている標語などについては（　）内に元のラテン語を表記してあるので、読者の理解を支えることになります。イタリア語から日本語に訳しずらい用語についても元のイタリア語の表記を（　）内に入れてあります。

参照サイト　SDB.ORG　t C:/Users/Owner/Downloads/ITA_-_STRENNA_2025.pdf　イタリア語版

※『サレジオ会会憲』の文章の邦訳に関しては従来の石川康輔師の訳文を使用せずに、阿部が独自に翻訳しました。イタリア語版と英語版とスペイン語版での文章の意味内容と石川訳を比較した結果、ニュアンスが異なっていて噛み合わなかったので新たに訳し直しました。

※（註 5）『ローマ・ミサ典書』ローマ、2020 年 3 月、240 頁、に関してはローマの規範版のデータであり、日本語版ではいまだに祈願文が全部邦訳されてはいないので（ひとつのパターンの祈願文だけを A 年・B 年・C 年で共通して用いている現状ですので）、阿部が新たに邦訳しました。

※本文中の［　］の箇所に関しては、読者の理解を助けるために、阿部による訳註として補足してあります。